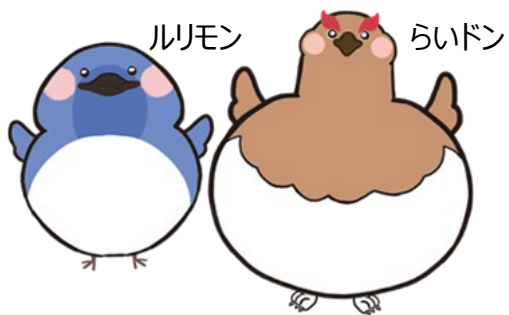


令和7年度SDGs未来都市等成果報告会（10.31開催）

地域資源を活かした関係人口の拡大

 妙高市 (2021年度SDGs未来都市選定)
Myoko City



● 地域の特徴（取組を発想した背景）

はじめまして。妙高市です。

Myoko City Introduction

新潟県妙高市【みょうこうし】

総人口 28,874 人(令和7年9月30日現在)
世帯数 12,232世帯(令和7年9月30日現在)
新潟県南西部、長野県と隣接、「妙高高原」一帯は観光地。
面積 445.63km²は、県土のおよそ3.5%にあたる。
東西 33.7km/ 南北 30.1km
周囲の長さ:186.2km



雪・四季。8つのスキー場。日本でも有数の豪雪地帯



雄大な自然。妙高戸隠連山国立公園が広がる



海と山の幸。新潟ならではのおいしい米とお酒



美肌の湯。市内で7つの温泉地、5つの泉質。3つの湯色



手つかずの自然がありながら、東京から北陸新幹線で1時間50分の近さ。

Myoko City



妙高戸隠連山国立公園
は2025年10周年！

2015.4妙高市誕生
基本理念は
「生命地域の創造」

2020.3
SDGs推進本部設立

2021.4
ゼロカーボン推進条例施行

2022.12県内初！
SDGs推進条例制定

2024.12 (2025-)
第4次総合計画策定

2019.12
第3次総合計画策定
SDGsの理念を形に

2020.6
ゼロカーボン推進宣言



2021.5
SDGs未来都市に選定



2023.3
SDGs推進実行計画策定

2024-
第2期SDGs未来都市計画

● 取組の内容と成果

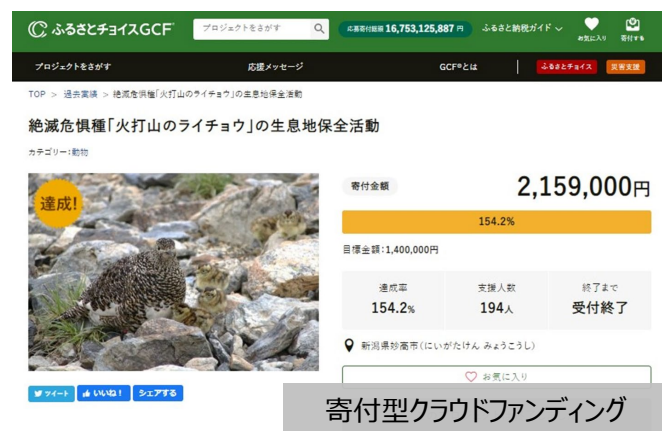
妙高戸隠連山国立公園の豊かな自然環境を主軸とし、関係人口の拡大を目指す

- ・2015年3月に上信越高原国立公園から約39,772haを妙高戸隠連山国立公園として独立分離、2025年10周年を迎えた
- ・火山・非火山が密集し、山岳と点在する高原や湖沼が一体的な自然景観を構成
- ・日本海側特有の多雪環境により、ハクサンコザクラをはじめとした高山植物の自生や美しい湿原が形成されている
- ・妙高山、戸隠山は山岳信仰の対象となり、現在も自然と人が共生する文化的景観を残している



● 生命地域妙高環境会議 環境サポーターズ

地域住民＋外部ボランティアによる環境保全活動、ライチョウ保全のためのクラウドファンディング、登山道整備や自然環境保全に協力いただくための国内2例目となる地域自然資産法に基づく入域料（協力金）を導入した



● 取組の内容と成果

● 妙高高原ビジターセンターを拠点とした関係人口の創出

妙高戸隠連山国立公園妙高市側の玄関口となる“^{まなびや}自然×文化”の遊学舎（環境省の直轄施設）

- ・併設のカフェスペースに滞在し、自然景観を眺める、国立公園の特徴を博物館的に学ぶ、フィールドを楽しむ情報を提供する施設
- ・施設で提供するツアーガイドには、市内の国際アウトドア専門学校卒業生が従事するなどUIターンの流れができあがっている



妙高高原ビジターセンターHPより引用



YAMAP登山道整備ツアー

● MYOKO BASE CAMP

Zoom社と連携デザインされたテレワーク施設、Powered by Zoomの認定施設として「国内初」の公共施設

- ・利用者の4割は県外からの利用者、短時間利用からひと月利用まで可能なワークスペースを完備
- ・「@nagomi_Café」を併設し、来訪者×地域住民の交流イベント「なごミーティング」など各種事業も定期的実施



● 困難やつまずきなど苦労したこと及びそれをどのように克服したか

● 新型コロナウイルス感染症の蔓延による移動の停滞

- ・S D G s 未来都市として認定を受けた2021年は、人の移動が制限
- ・全国的に物価高騰の影響もあり、観光売上の減少の煽りを受けた

● 市内の自然資源のブラッシュアップを実施

- ・Beyond CORONAを見据え、木道等ハード面の整備を進め、トレッキングやアウトドア・キャンプ等の誘客により四季型観光による流れを創出している
- ・テレワーク施設を整備し、リモートワークを希望する人材の雇用創出をすすめた
- ・MYOKO BASE CAMPでの来訪者交流イベント“なごミーティング”は開催の都度、定員を超える応募があり、着実にファンを創出している



● 推進体制（ヒト・カネ・モノ）の整備方法

● 来訪者×市民…一人ひとりが妙高ファン！

- ・来訪者一人ひとりがS D G s の推進者となれる環境（自然×地域活性、生物多様性×ボランティア等…）
- ・MYOKO BASE CAMPでは、“なごミーティング”やワーケーションなど、多様な関係人口施策を展開
- ・春休みや夏休み、子どもを遊びに連れていきたいけど仕事も…そんな声から、親はリモートワークをしながら、こどもは自然を満喫できる『親子ワーケーション』を実施している。毎回定員いっぱいの申込となっている。

● 環境サポーターズ

- ・妙高に来訪し、自然に魅せられたり、自分自身が楽しむ自然を保全するため、様々な思いから全国各地から環境サポーターズを募集

● 地域自然資産法による入域料（自然環境保全のための協力金）・ガバメントクラウドファンディング

- ・登山をすれば道ができる。自分たちだけでなく後から訪れる人たちが自分と同じ素晴らしい体験ができるように、登山者自ら自然保全や登山道整備に使用される協力金に自発的に協力いただいている。協力者には木製の根付をプレゼントすることで、単なる寄付でなく自らが協力したことの証となっている。
- ・火打山ライチョウの生息地保全活動に資するため、寄付型のガバメントクラウドファンディングを実施例年、目標額を超える協力をいただいている



●庁内調整・外部調整の工夫

●妙高市総合計画・SDGs推進本部

「第4次総合計画」や「SDGs未来都市計画」など関連計画を一体的に推進するため、市長を本部長とする総合計画・SDGs推進本部会議を設置。

本会議では、SDGsの17の目標達成に向けた各種施策の連携・検証を図り、政策効果の最大化を目指すとともに、社会情勢の変化に対応した取組の見直しを行うなど、全庁が一体となって、環境・経済・社会の好循環を生み出す“妙高型SDGs”の実現を推進。

●妙高市SDGs普及啓発実行委員会

多様な官民連携組織を組成。市の施策と連携しながら、SDGsの理念を地域施策により高いレベルで反映させることを目的に、普及啓発や具体的な取組の提案・検証を行う。

当該実行委員会主催事業「みようこうグッドライフフェア～IKAZUCHI～」は、好評であり、市を代表する一大イベントとして実施。



●SDGsの視点と政策をどのように結びつけたか

●妙高市の強みと転機

妙高戸隠連山国立公園をはじめとする豊かな自然環境や生物多様性は、市の「最大の資源」と位置づけ。2015年3月の北陸新幹線の金沢延伸開業により、東京圏等との時間的距離が大きく縮まり、都市住民との新たなつながりが生まれた。

●SDGsの視点との結びつき

Goal 11（住み続けられるまちづくり）、Goal 13（気候変動への具体的対策）、Goal 15（陸の豊かさを守ろう）などに重点を置き、自然環境の保全と活用を両立させる施策を推進。また、国立公園・自然景観を活かした持続可能な観光・交流政策を展開。笹ヶ峰高原などでの大学の陸上合宿や企業研修、インバウンド誘客など、「自然環境」を核とした人の流れを創出。

●政策の方向性

自然を守り、活かし、次世代へつなぐというSDGsの理念を政策の軸に、環境保全と地域経済の好循環を生む「妙高型SDGsモデル」として、関係人口拡大・地域活性化・雪国でのカーボンニュートラルモデルにつながる取組をさらに強化。



●SDGsの取組を推進して良かったこと・周囲の反応など

●市民の行動変容

市内の小中学校における総合的な学習の時間でのSDGs学習を積極的に推進したことにより、子どもたちの環境意識が高まり、家庭や地域にもSDGsの考え方が広がっている。
また、市内団体や企業を対象とした出前講座や市の取組紹介などを通じて、市民によるごみ減量や環境美化活動など、率先的な「行動変容」が進みつつある。

●大学等との連携拡大

新井高校と筑波大学・麗澤大学・松本大学・長野大学などとの高大連携をはじめ、大学・企業・山岳団体等との協働が進展している。
こうした取組により、教育・研究・交流を通じた関係人口の拡大や地域活性化につながる好循環が生まれ妙高市の豊かな自然を生かした“妙高型SDGs”の推進に弾みを与えている。



●今後の展望・他地域への展開

妙高の自然環境は地域の「宝」。これからもこの自然を大切に持続可能なまちをつくる

●地域の宝を磨くこと ～それがこの地域の強みになる～

妙高の豊かな自然環境は、地域の誇りであり、かけがえのない「宝」。
この美しい自然は、私たちの暮らしを支え、訪れる人々を魅了する地域の根幹であり、環境そのものが「資源」であり「ブランド」。
今後は、人口減少や担い手不足といった課題が進む中にあっても、自然環境を軸にしたまちづくりを深化させ、持続可能な地域社会の実現を目指す。

そのために、都市圏の住民や環境意識の高い人々とのつながりを広げ、「妙高ファン」「環境サポーターズ」などの関係人口を積極的に受け入れながら、自然環境の保全や地域活動とともに進めていく。
こうした取組を通じて、妙高の自然を次世代へ引き継ぐとともに、他地域における“自然共生型の地方創生モデル”として発信していく。



自然環境を活かした新たな展開 ～妙高市は挑戦を続けていきます～

●PCG（ペイシャンスキャピタルグループ）・Six Senses「シックスセンス妙高」開発を契機に

妙高市は、誕生以来一貫して、自然と共生する地域づくりを進めてきた。国際アウトドア専門学校の開校・妙高戸隠連山国立公園の独立をはじめ、自然資源の保全を通して関係人口拡大に寄与してきた。

その中で、2025年10月21日、シンガポール投資ファンドの日本法人「PCG」主導による大規模リゾート開発計画の一環として、ホテルブランド「Six Senses」との初の共同プロジェクトとして「シックスセンス妙高」の開発が発表された。

本プロジェクトは、2000億円規模とされる全体開発の一部であり、県内外から注目を集めていることから、妙高市における上質な観光地形成への期待が高まっている。

北陸新幹線によるアクセス性向上と豊かな自然環境を背景に、都市圏からの来訪者やインバウンド観光客の誘客が見込まれる。地域経済への波及効果が期待される。

妙高市では、今後も、自然環境と共生しつつ、環境・社会・経済が有機的に結びついた持続可能なまちづくりを推進し、地域資源を活かした新たな産業・交流の創出やさらなる関係人口の拡大につなげたい。

「シックスセンス妙高」の開発は、単なるリゾート施設の整備にとどまらず、自然を守りつつ地域の価値を高める持続可能な地域活性のモデルとなることが期待されており、次なる一手となる「挑戦」を、妙高市は続けたい。



～ SDGsのその先「Beyond SDGs」へ～